

聴覚障害児の母子相互作用における共同注意の役割

河内 清美

【背景・目的】

先天性の聴覚障害 (Hearing impairment) 児は、音声情報が得られにくいいため、コミュニケーション、言語発達が遅れ、その後の社会性の発達にも影響が生じる (中村, 2007)。聴覚障害によるハンディキャップを軽減するためには、できるだけ早く聴覚障害を発見し、補聴機器を装用しながら適切な支援を受けることが望ましい。近年、新生児聴覚スクリーニング検査の普及によって、聴覚障害が早期に発見されるようになり、補聴機器などの技術の進歩により、聴覚の活用が促されるようになった。しかし、「新生児聴覚スクリーニングマニュアル」では、生後 3 ヶ月頃までに精密検査を受け、生後 6 ヶ月頃には補聴器を装用して支援を開始するという目安が示されているが、様々な事情により、この目安通りに支援が開始されているとは言えないのが現状である。早期支援の目的は、「安定した母子コミュニケーションを保障し、健やかな母子関係を育むこと」であり、聴覚障害児の聴覚を最大限補償しながら、視覚を十分に活用した前言語的コミュニケーションの形成を図ることが必要である (中村, 2004)。早期支援では、視覚を活用した母子の相互作用を促し、共同注意による象徴的な言語入力を促していく必要がある。

共同注意 (joint attention) とは、相手と同じ対象に対する注意を共有することで、相手と同じイメージを共有しているという情動的で間主観的な体験共有が必要である (大藪, 2009) とされている。共同注意には、他者の注意を自己や興味の対象事物に向けさせようとする共同注意の開始 (Initiating Joint Attention: IJA) と、他者が視線を向けたり指さしたりすることに反応して、自己の注意を他者や他者の興味の対象事物に向ける応答 (Responding to Joint Attention: RJA) がある (Mundy, 2007)。共同注意を開始する力が、意図的なコミュニケーションの開始につながり (Brinck, 2001)、子どもの注意の焦点に直接関連する言語入力が、言語習得を促進させていく (Tomasello, 1988)。

聴覚障害児の共同注意の発達に関する先行研究 (e.g., Depowski et al., 2015) では、母子相互作用内で共同注意の成立が難しいことが指摘されているが、聴覚に障害があっても、視覚的に母親の視線や表情、行動などを知覚することはできる。視線追従や交互注視、視覚的な共同注意は可能であると予測する。さらに、母子の共同注意の成立には、母親のかかわり方が大きく影響する。聴覚障害児とその母親の相互作用に関する先行研究 (e.g., Bortfeld, & Oghalai, 2018; Gabouer et al., 2020) では、母親の応答的でマルチモーダルなかわりの方が聴覚障害児の共同注意の成功率を高めることが示されていた。

そこで、本研究では、支援機関を訪れて間もない共同注意の獲得時期にいる低年齢の聴覚障害児の共同注意スキルの発達を調査し、母子相互作用場面でのアイコンタクトや子どもからの応答が得られる母親のかかわり方を明らかにすることを目的とした。本研究の仮説を、「聴覚障害児の共同注意は、定型発達児と同様に獲得される」、「聴覚障害児の反応を引き出しやすいのは、応答的で、複数のモダリティを用いたかわり方である」とした。

【研究方法】

研究対象児は、聴覚支援学校の教育相談 (早期教育) に通う 11～20 ヶ月齢の聴覚障害児と母親の 8 組と 10～16 ヶ月齢の聴覚に障害がない定型発達児 (健聴児) と母親の 9 組であった。個人調査表で対象児の概観を把握し、乳幼児発達スケール (KIDS) で発達状況を調査した。共同注意のスキルは早期社会コミュニケーション観察尺度 (Early Social Communication Scales: ESCS; Mundy et al., 2003) で共同注意の開始 (IJA) と共同注意への反応 (RJA) を評価した。さらに、10 分間の母子相互作用場面の観察から、母

子のアイコンタクトの回数と子どもからの反応が得られた母親のかかわり方を開始的なものと応答的なものに分類するとともに、かかわりに使用する感覚モダリティの使用状況を評価した。

【結果と考察】

(1) 共同注意スキルの発達

ESCS による共同注意スキルの発達は、IJA の総生起頻度も RJA の生起率も聴覚障害児と健聴児で差がなかった。また、母子相互作用場面のアイコンタクトの回数では聴覚障害児と健聴児で差がなかった。このように、異なる 2 つの評価方法を用いても、低年齢の聴覚障害児の共同注意は、全体としては、定型発達児と同様に獲得されることが示された。したがって、「聴覚障害児の共同注意は、定型発達児と同様に獲得される」という仮説は支持された。しかし、聴覚障害児は健聴児より低レベルの IJA の生起頻度が有意に少なく、高レベルの IJA の生起頻度は有意に多かった。聴覚障害児の共同注意スキルは全体的には健聴児と同様であるが、共同注意の開始行動で、指差しや物を見せる行動が多かった。聴覚障害児の母親は、音声言語に、指差しや身振り、手話などの視覚的なコミュニケーション手段を併用していることが多いために、聴覚障害児も、コミュニケーション手段に取り入れていると考えられる。このように、聴覚障害児は健聴児と同様に共同注意を発達させているものの、共同注意を開始する方略は健聴児と異なる可能性が示唆された。

聴覚障害児と母親のアイコンタクトの回数と年齢の間に、有意な正の相関が見られ、年齢が上がるに従い、母子のアイコンタクトの回数が多くなっていた。健聴児と母親のアイコンタクトの回数と年齢の間には相関は見られなかった。さらに、ESCS の IJA の生起頻度や RJA の生起率と母子相互作用場面のアイコンタクトの回数との相関分析を行うと、聴覚障害児の RJA の生起率とアイコンタクトの回数に有意な正の相関が見られたが、健聴児には見られなかった。

(2) 聴覚障害児の反応を引き出しやすい母親のかかわり方

母子相互作用場面で、聴覚障害児の母親も健聴児の母親も、子どもに対して、開始的なかかわりと応答的なかかわりをほぼ同等の割合で行っており、母親の行動に使用されているモダリティの頻度に差はなく、どちらの母親もマルチモーダルなかかわりが多かった。しかし、聴覚障害児の母親は健聴児の母親よりも、子どもからの反応を得る成功率が低かった。聴覚障害児の母親の応答的なかかわりに対する成功率は、健聴児の母親よりも有意に低かった。聴覚障害児の母親における開始的なかかわりと応答的なかかわりを比較すると、応答的なかかわりの成功率が有意に低かった。また、使用するモダリティで比較すると、聴覚障害児の母親では、モノモーダルよりマルチモーダルの成功率が有意に高かった。健聴児の母親における開始的・応答的なかかわりに対する成功率、および、モノモーダル、マルチモーダルなかかわりに対する成功率には、差がなかった。よって、本研究の対象年齢では、聴覚障害児からの応答を引き出しやすいのは、開始的でマルチモーダルなかかわり方をするということであることが示唆された。それゆえに「聴覚障害児の反応を引き出しやすいのは、応答的で、複数のモダリティを用いたかかわり方である」という仮説は、部分的に支持された。

従来、聴覚障害児の共同注意の発達には遅れが見られると考えられてきたが、本研究の対象児(11～20 ヶ月)では共同注意の発達に遅れは見られないという知見が得られたことは意義深かった。さらに、低年齢の聴覚障害児の反応を引き出しやすいかかわりは、開始的でマルチモーダルなかかわりであることが示された。聴覚障害児の早期支援や保護者支援において、このようなかかわり方を支援者が実践したり母親に助言したりすることは聴覚障害児の社会性やコミュニケーションの発達を促すための一助になると考える。(比較発達心理学)